HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東チベットの宗教空間 : 中国共産党の宗教政策と社会変容 [全文の要約]
Author(s)	川田, 進
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7008号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65752
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Susumu_Kawata_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文概要書

川田進

学位申請論文『東チベットの宗教空間――中国共産党の宗教政策と社会変容』は、2014年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開促進費（研究課題番号：265116）の交付を受け、2015年2月27日に「現代宗教文化研究叢書4」として、北海道大学出版会より刊行された。

本概要書の構成を以下に示す。

１．研究履歴
２．研究目的と中国地域研究
３．調査拠点の設定
４．調査方法
５．先行研究と調査の障害
６．本論文の意義
７．論文構成
８．今後の課題
【資料１】現地調査一覧
【資料２】「チベットを歩く」連載一覧
【資料３】初出一覧
【資料４】日本学術振興会科学研究費補助金交付一覧

１．研究履歴

川田進（以下筆者）は、大阪外国語大学及び同大学院にて、現代中国研究を専攻した。1988年修士課程修了後、中国共産党の文芸政策研究（政治と文芸の関係）に取り組み、その成果を牧陽一（現在埼玉大学人文社会科学研究科教授）・松浦恆雄（現在大阪市立大学文学研究科教授）・川田進共著『中国のプロパガンダ芸術――毛沢東様式に見る革命の記憶』（岩波書店、2000年、全285頁、川田担当：第3・4・8章）として公刊した。

1991年以降、研究の軸足を中国共産党の宗教政策に移し、東チベットにおける仏教信仰の動態調査に着手し現在に至る。本論文が扱う東チベット（チベットカム地域・アムド地域、【図１】）とは、主に中国四川省・青海省・甘粛省・雲南省のチベット人居住地区を指す。1991年以降、東チベット広域において計26回（各調査期間は10日～15日）の調査を行った。その後、東チベットの宗教状況を周縁部から観察する目的で、台湾（２回）、中国新疆ウイグル自治区、ネパール、タイ、インド（各１回）にて予備調査を行い、イスラームや台湾仏教の動向を視野に入れた【資料１】。

【図１】東チベット（カム・アムド）の位置

中国共産党の宗教政策研究の成果は、中国研究誌『火鍋子』（翠書房）に連載「チベットを歩く」（全 38 篇、1999 年～2014 年、【資料２】）を掲載後、詳細な資料を付して勤務先の「大阪工業大学紀要」（全６篇、2007 年～2014 年）及び研究誌「宗教と社会貢献」（１篇、2012 年）他に発表した（【資料３】）。その後、既発表論文を再構成し、修正加筆を経て、北海道大学出版会より刊行した。

長期にわたる海外調査を支えたのは、日本学術振興会から交付された科学研究費補助金である（【資料４】）。

２．研究目的と中国地域研究

本論文は東チベットという地理的空間を「宗教と政治」「宗教と社会」という視点から論じた地域研究の成果である。ただし、地域の固有性のみを強調した東チベット地域研究ではなく、他の領域との相関性を視野に入れた中国地域研究である。他の領域とは、長期短期を問わず東チベットで宗教活動を実践している漢人・華人の出家者や在家信徒の存在を指している。彼らは東チベットの宗教空間が持つ独自性を中国地域研究の中に位置付ける上で重要な役割を果たしている。

地域研究とは現実世界が抱える諸課題に対する学術研究を通じたアプローチである。本研究は漢人・華人とチベット人が共有する宗教空間に現れた多面的な信仰の動向を分析することを通して、チベット問題解決の糸口を探ることを念頭に置いた。

地域研究を支える研究手法は、現地での聞き取り調査、参与観察、文献調査である。文献は現地調査の中で掘り起こした内部発行資料や漢人信徒の組織がインターネット上に掲げた各種資料、そして現地で収集した政府公告等を重要視した。その結果、政治学・歴史学・宗教学・社会学・文化人類学といった伝統的な学問分野が対象にしづらかった事例を多数拾い上げることができた。

1959 年ダライ・ラマ 14 世のインド亡命後、中国共産党とチベット亡命政府の対立が深まり着地点を見いだせない状況が続くなか、筆者はどちらか一方の主張のみに賛同する考えはもっていない。筆者が本論文で最も訴えたいことは、東チベットにおける宗教信仰の現場には、両者のプロパガンダと相容れない状況も存在していることである。多くの漢人信徒を獲得し多層化し始めた東チベットの宗教空間を、中国共産党の宗教政策という視点から読み解きその特質を浮き彫りにすることが本論文の目的である。宗教政策は党の指導者が交代すれば方針に変更が生じるため一様ではない。中華人民共和国における宗教活動の変化は、宗教者や宗教組織が中国共産党の宗教政策に対処してきた結果でもある。

３．調査拠点の設定

1991 年から約 10 年間を費やして、東チベット四省の主要地点で予備調査を行い、政治と宗教の全体像を把握することに努めた。東チベットが中央チベット（現在のチベット自治区に相当）と大きく異なる点が三つある。東チベットは歴代ダライ・ラマ政権の支配が必ずしも十分に及ばなかった地域であること。東チベットにはチベット仏教を信仰する多くの漢人出家者・漢人信徒が存在すること。そして、東チベットは中国共産党の宗教政策、チベット政策と関係の深い地域であること。

ここには中国共産党の軍事行動が残した二つの道、つまり「紅軍長征の道」（1935 年～1936 年、主に第四方面軍）と「チベット解放の道」（1950 年、第 18 軍北路先遣隊）が刻まれている。前者は中国工農紅軍が国民党軍の大規模包囲戦に耐えきれず、疲弊しながら一万二千キロを敗走した大移動である。後者はチベットを「イギリスを中心とした帝国主義の支配から解放する」という名目で、中国共産党が強行した軍事進攻のルートを指している。この二つの道が重なり交差する一帯が、現在の四川省甘孜チベット族自治州（以下、甘孜州と略す）及び周辺地域である。

2001 年以降、研究テーマを「四川省甘孜州における中国共産党の宗教政策」に絞り、以下の調査拠点（【図２】）で複数回の調査を行う一方、現地で文献資料、映像資料、政府公告を精力的に収集した。

(1) ラルン五明仏学院（甘孜州色達県）　計６回調査

2001 年 12 月、2004 年 8 月、2007 年 8 月、2010 年 8 月、2011 年 8 月、2012 年 8 月

(2) ヤチェン修行地（甘孜州白玉県）　計６回調査

2003 年 8 月、2005 年 8 月、2007 年 8 月、2010 年 8 月、2011 年 8 月、2012 年 8 月

(3) デルゲ印経院（甘孜州徳格県）　計２回調査

2003 年 8 月、2010 年 8 月

(4) ゲダ５世と中国共産党の統一戦線活動（甘孜州甘孜県）　計３回調査

2003 年 8 月、2005 年 8 月、2010 年 8 月

(5) 青海省玉樹県　計３回調査

1997 年 8 月、2009 年 8 月、2013 年 8 月

【図２】甘孜州地図と調査拠点

４．調査方法

現地調査は筆者が単独で実施したものであり、中国の研究機関や地方政府に連携や協力を求めたことはない（ただし、2012 年８月のみ日本人研究者１名と同行）。大学を含む政府系機関との共同研究は、自由な行動を束縛し、調査場所や調査内容の制限につながるからである。そして、質問紙調査も実施しなかった。アンケート方式により人々の意識や行動の特徴をつかむ意義は認めるが、中国政府は外国人が少数民族地区で宗教活動に関与する（調査も含む）ことを嫌うため、質問紙を用いた量的調査を行うことは実質不可能であり、当初から想定しなかった。

筆者が重視した方法は、聞き取り調査と短期の参与観察である。被調査者は高僧、一般僧尼、漢人・華人信徒が中心である。高僧への謁見と取材は、「外国の客人」という立場で秘書役の僧や家人に申し込み、多くの場合許可された。ラルン五明仏学院のテンジン・ギャムツォ副学院長、ヤチェン修行地のアチュウ・ラマとアソン・リンポチェ、デルゲ印経院のツェワン・ジメ院長、白利寺のゲダ６世から直接宗教活動や宗教政策の実態について話を伺えたことは大きな意義があると考える。ただし、彼らは宗教者として指導的立場にあり慎重に言葉を選んでいるため、時に言外の意味を汲み取らなければならないこともある。

聞き取りを行う際、先ず調査者が「訪問した目的」や「日本人から見たチベット仏教へ関心」等について説明した後、雑談や苦労話を交えながら、相手に質問を投げかけていった。日本は仏教を重んじる国であり、東チベットの高僧が日本を訪問した例を伝えると、５人に１人の割合で私の質問に応じてくれた。ただし、政治と宗教に関する質問や個人の立ち入った話を持ちかけると、３人の内２人は会話を遮った。政治的な話題について、チベット人は日本での報道を期待して積極的に語ることもあったが、大半の者が口を閉ざした。聞き取り調査で使用する言語は主に漢語であり、相手によっては英語を併用することもあった。

チベット人に漢語で質問する場合、日本やインドの宗教状況を紹介することで相手に利益を与える工夫を行った。相手の氏名を尋ねることはせず、履歴や生育歴に関する質問は、不信感を抱かれるため極力行わなかった。筆者はチベット仏教の信仰者ではないが、日本から来た「在家信徒」と誤解されることが多く、その誤解は調査の際の潤滑油となった。漢人信徒への質問の柱は「信仰の動機」「職業」「家族との関係」「情報の入手方法」であり、他の質問は相手により異なった。調査を行う時の問題点は、内容の記述と分析に共感的態度と客観性を両立させることが難しいことであった。

聞き取り調査の際、録音と録画は一切行なわなかった。理由は仮に筆者と公安当局との間でトラブルが発生した場合、被調査者や情報提供者に大きな不利益をもたらすからである。調査から得られた個人情報の保護については最大限の配慮を行った。フィールドノートは 1990 年代にＡ６版（文庫本サイズ）を、2000 年以降はＡ７版（トランプサイズ）を使用した。聞き取りの途中でメモを取ることはせず、重要な情報であっても単語と短文のみノートに記し、出国手続を終えた後、記憶をたどり簡潔に文章化した。本書で紹介した聞き取りの事例は、本人が特定されないように注意を払った。

その他、個人宿や個人商店の主人、タクシー運転手やバスの乗客から寺院や高僧の情報、政治的な緊張状況、宗教指導者の家族の紹介といった情報提供や便宜を受けることもあっ

た。そこから得られた情報は、現地の理解に大いに役立った。四川省康定県、阿壩県、同仁県、青海省玉樹県では、モスクを訪問した際にイスラームの指導者や管理職から、現地の宗教事情及びムスリムと仏教徒の関係について話を聞くことを試みた。ムスリムの目から見たチベット仏教の現状と問題点は、チベット仏教徒への聞き取り調査を補完する役割を果たした。

ヤチェン修行地では高僧宅や高僧の侍者宅に泊まり込み、宗教活動の現場で短期の参与観察を行った。高僧が訪問者に対して行う会話や対応、侍者の職務内容を客人の立場でつぶさに観察する機会に恵まれたことは望外の幸せであった。2011 年 8 月に修行地主宰者アチュウ・ラマの葬儀に参列し、各地から弔問に来た高僧の行動を間近で見ることができた。高僧が漢人信徒を対象に行う授業を聴講し、瞑想会に参加し、信徒の共同食堂を利用することで、漢人信徒から率直な話を聞くことができた。五明仏学院ではチベット人の僧坊に宿泊を依頼し、一日の修行生活や個人指導の場面に立ち会わせていただくこともできた。

毎回時間の制約と向き合いながらの短期調査と参与観察であるが、複数回の訪問調査を重ねることで、過去の見聞と解釈に修正を加えていった。

５．先行研究と調査の障害

日本では甘孜州を含むチベット高原東部の宗教状況及び宗教政策に関するまとまった研究及び現地調査の実施例は極めて少ない。別所裕介はアムドの青海省チベット地区を対象に、開発・観光・環境・信仰に関する現地調査を行っている。阿部治平は青海省西寧市で日本語教師を務めながら、アムドの宗教、民俗、農業に関する調査を手がけた。デルゲ印経院に関しては、中西純一他の調査報告が公刊されているが、政治と宗教の関係への言及はない。小林亮介は清代から民国時期にかけての東チベットの歴史と政治に関する研究を行っている。その他、複数の日本人言語学者がカムやアムドで方言調査を実施しているが、日本人研究者による東チベットの宗教政策に関する現地調査は報告されていない。

欧米では David Germano が 1990 年以降複数回、Tim Johnson が 2009 年に甘孜州色達県で調査を行ったが、外国人による甘孜州宗教調査は概ね未開拓の状況にある。

外国人による現地調査が進展しない理由は、地理的な要因と現地の政治情勢である。甘孜州は海抜 3000 から 4000ｍに位置し、四川省成都市より陸路で 800 から 1000ｋｍの移動を必要とする。主要な道路は険しい峡谷沿いにあり、常に落石と土砂崩れの危険がつきまとう。隣の県へ移動するには、5000ｍ近い峠を越えなければならない。峠付近は８月でも降雪により、車輌の通行が困難になることがある。身体的なリスク（高度障害、気管支疾患、心臓への負担、狂犬病、ペスト）に加え、精神的な苦痛（情緒不安、不眠）も伴う。血中酸素濃度の低下は、頭痛、嘔吐、めまい、食欲不振、集中力の低下等の症状を引き起こし、最悪の場合、脳や肺のトラブルにより死に至ることもある。冬期は最低気温が零下２０度まで下がることも珍しくない。

甘孜州内の各県が外国人に開放されたのは 1990 年代である（各県により異なる）。仏教信仰の篤い土地柄であり、僧侶や民衆と公安当局の衝突が多発する地域であるため、対外開放後も外国人の訪問はしばしば厳しい制限を受けてきた。中国における宗教活動の指針を定めた法令「宗教事務条例」（2004 年）の第４条には、「宗教団体、宗教活動拠点、宗教

事務は外国勢力の支配を受けない」と記されている。現地の公安当局はこの条文を都合よく解釈し、外国人観光客の寺院訪問や外国人研究者の現地調査を制限することがある。東チベットにおける宗教調査は、常にいくつもの困難と隣り合わせた過酷なものである。

６．本論文の意義

中国人研究者が中国共産党の宗教政策を研究する際、研究の自由は存在しない。毛沢東、鄧小平、江沢民、胡錦濤それぞれの指導者が示した政策に沿った研究が認められているにすぎないからだ。現在、江沢民の「四原則」と胡錦濤の「宗教と和諧」政策が研究の基本であり、チベット政策においては第５回チベット工作座談会での決定事項を踏まえた研究が行われている。中国人研究者が行う宗教政策研究とは、言葉を換えれば党の宗教政策の宣伝活動である。したがって、共産党の見解に疑問を抱いたり、異論を唱えたりすることは不可能であり、チベット亡命政府の見解はすべて否定しなければならない。

中国では宗教政策研究に従事する者の多くが党や政府の研究機関、公安や治安維持部署に籍を置いているため、研究者個人の立場で自主的な研究活動や調査を行い、成果を発表することは許されない。党の政策を公に批判することも許されていない。例えばラルン五明仏学院における宗教施設や僧坊の撤去、高僧の身柄拘束、尼僧の放逐、宗教活動の制限といった事例を、信教の自由や基本的人権の視点から論じることはできない。

「チベット人居住地区における宗教政策」という研究テーマは、中国国内では「政治的に敏感な課題」と考えられており、党と政府の指導下で慎重に行うことが求められる。軍事行動に関する内容を含む場合は、人民解放軍の指導と連携も必要となる。それゆえ、宗教政策が抱える問題点、矛盾点、宗教組織への引き締め政策等に関する調査や研究を行うことができるのは外国人研究者のみと言える。

中国共産党の宗教政策研究に関して、中国人研究者は大きな制約と不自由の中で限定的な研究に従事せざるをえないが、外国人研究者は中国の国内事情を前に禁欲的になる必要はない。筆者は文献資料と現地調査で得られた事実を記述し、慎重な分析と冷静な解釈を行うことが、現地の宗教状況の改善とチベット問題解決の糸口を見つけることにつながると確信している。

７．論文構成

以下に章題と各章の要点を掲げる。

序章「問題の所在と研究の視座」

「チベット問題」と中国地域研究、東チベットへの関心、チベット仏教概説、政府系文献資料の特徴と限界、現地調査の障害と調査拠点の設定、調査方法等、本論文の基本視点を記した。

第１章「中国共産党の宗教政策――毛沢東から胡錦濤まで」

中国共産党の宗教観はマルクス・レーニン主義に基づいている。ただし、共産党は社会主義時期においては、宗教が長期間存在することを認めている。本章では共産党の宗教観

と党員に課された制約、政府の宗教事務の特徴を確認した後、毛沢東、鄧小平、江沢民、胡錦濤が主導した宗教政策とチベット政策を俯瞰した。宗教政策については、党大会、統一戦線工作会議、全国宗教会議の文献を使用した。チベットにおける宗教政策については、計５回開催されたチベット工作座談会の紀要及び関係する「中共中央文件」を検討した。

第２章「『愛国活仏』ゲダ５世の虚実と軍の宗教政策」

ゲダ５世はチベット仏教白利寺の化身ラマである。中国共産党はゲダ５世を党の政策を支援した「英雄的」宗教指導者と高く評価している。本章ではゲダ５世を共産党の軍事行動と統一戦線活動のキーパーソンと位置づけ、活動の目的と人物像の虚実を政府系資料とチベット政府に雇用されたイギリス人フォードの回顧録から検証した。そして、共産党がゲダを利用して愛国主義教育と統一戦線活動を展開する理由を導き出した。

第３章「民主改革・文化大革命時期のデルゲ印経院」

デルゲ印経院は、チベット仏教の経典印刷用の版木を所蔵する「知の保管庫」である。1729 年の開設以来、高度な伝統技術を脈々と受け継いできた。中華人民共和国建国後、甘孜州内の仏教寺院や宗教施設はことごとく破壊されたが、印経院は破壊の標的とされながらも実際の被害は小さかった。誰がどのような方法で、民主改革と文化大革命という宗教破壊運動から印経院を守ったのであろうか。本章は前半でデルゲ印経院の歴史と役割を土司制度の視点から概観した。後半は２人の党委員会書記チェンラウとヤンリンドジェに着目し、印経院保護の謎に隠された共産党のチベット政策を明らかにした。そして、2003 年の現地調査と 2010 年関係者へのインタビューから、印経院を舞台にした北京と東チベットの政治の連携を解明した。

第４章「文革後のデルゲ印経院と統一戦線活動」

中国共産党は 1978 年第 11 期３中全会にて、文化大革命を清算し、改革開放路線の推進へと舵を切った。そして、鄧小平を核とした党指導部は、階級闘争から経済建設へと指導方針を転換した。本章では党の路線変更が甘孜州内の宗教政策と宗教活動にどのような変化をもたらしたのかを検証した。先ず甘孜州の宗教復興の状況を「中共中央 1982 年 19 号文件」との関連から考えた。次にデルゲ印経院が文化大革命終息後、早急に活動を再開し修復作業を進めた理由を、チベット亡命政府の徳格県視察（1979 年、1980 年）とパンチェン・ラマ 10 世の甘孜州訪問（1986 年）という統一戦線活動の事例から明らかにした。当時の甘孜州の動向を知るための資料として、『中国共産党甘孜州歴史大事記』とチベット工作座談会の紀要がある。これら政府系資料に記された宗教政策から、甘孜州の宗教動向と党中央の対外的な戦略を読み解いた。

第５章「ラルン五明仏学院粛正事件」

ラルン五明仏学院は、1980 年に高僧ジグメ・プンツォが開いたチベット仏教の教育機関である。学僧は一万数千人を数え、チベット文化圏で最大規模の仏学院である。本章は 2000 年から 2001 年に発生した五明仏学院への粛正事件の原因と経過を解明した。そして宗教政策における宗教教育機関の位置づけを考えた。その際、現地調査で発見した２通の政府文

書（2001 年)、仏学院が内部発行したジグメ・プンツォの評伝を手掛かりとした。そして、複数回の現地調査とテンジン・ジャンツォ副学院長へのインタビュー（2001 年、2004 年）を踏まえて、党中央の権力移行時期（総書記の交代）に発生した粛正事件を多面的に浮き彫りにした。

第６章「ヤチェン修行地の支配構造と宗教 NGO」

ヤチェンは 1985 年にアチュウ・ラマという高僧が開いた修行地である。僧・尼僧・漢人信徒・華人信徒より構成され、総数は一万数千人に達する。修行地の構造を論じる際、ウェーバーのカリスマ論から見たアチュウ・ラマ像、チベット仏教の化身ラマと師資相承制度を用いた。そして、大規模宗教コミュニティが存続可能な理由、アメリカや香港の宗教 NGO と華人信徒が支える修行地運営資金の仕組みを宗教政策との関連から明らかにした。これまでヤチェン修行地の存在が明らかにされなかったのは、遠隔地かつ高地に位置し多数の野犬が生息するという悪条件が、外国人研究者を遠ざけてきたからである。

第７章「漢人・華人信徒の信仰とスピリチュアリティ」

現在、東チベットの宗教空間を論じる際、漢人信徒・華人信徒の存在を無視することはできない。彼らが目指す二大聖地はラルン五明仏学院とヤチェン修行地、そして新たにカトク寺やゾクチェン寺が注目を集めている。筆者は漢人信徒を「仏教教義の理解を重視するグループ」と「瞑想を通じたスピリチュアリティを重視するグループ」に分け、漢人・華人の精神世界とチベット仏教の関係を明らかにした。そして、「ニンマ・インフォメーション」（寧瑪資訊）や華人信徒によるチベット仏教支援活動と宗教公益事業の実態を胡錦濤時期の宗教政策を軸に分析した。

第８章「仏学院の震災救援活動と宗教の公益活動」

2014 年 4 月、青海省のチベット人居住地区で大震災が発生した。ラルン五明仏学院の高僧ケンポ・ソダジは即座に救援隊を派遣し、医療と不明者捜索を中心とした支援活動を展開した。本章は救援隊に参加した漢人信徒の手記にもとづき、活動の内容と現地で生じた問題点を明らかにした。過去に大規模な粛正を受けた仏学院が、政府から救援活動を称讃された理由を胡錦濤政権の「宗教と和諧」政策から考える。そして、宗教とソーシャル・キャピタル、草の根 NGO という視点から、仏学院の信徒グループが行った社会貢献活動の意義と限界を示した。

第９章「『2008 年チベット騒乱』の構造と東チベットの動向」

2008 年 3 月、チベット自治区のラサで大規模な騒乱が発生した。僧侶や民衆が治安維持部隊と衝突する場面がテレビニュースで繰り返し流されたことは記憶に新しい。「2008 年チベット騒乱」（以下「騒乱」と略す）は一般に「3 月 10 日チベット自治区ラサにおける僧侶の抗議行動から始まった」と言われている。星野昌裕他『党国体制の現在』、柴田哲雄『中国民主化民族運動の現在 』、興梠一郎『中国巨大国家の底流』も同様の見解を出している。一方、唯色（オーセル）『鼠年雪獅吼』は東チベットの騒乱発生状況に言及し、貴重な資料を発表している。筆者は「騒乱」を「2008 年ラサ騒乱」と「2008 年東チベット騒乱」に分

け、両者の発生状況を比較検討した。そして現地調査の成果とその後の騒乱の状況を踏まえて、「東チベット騒乱」の起点が「2.21 同仁事件」であることを提起した。さらに、宗教的主張を含む抗議活動を「デモ法」「刑法」との関連で検討した。中国の政府系研究者は「騒乱」の発生原因を「ダライ集団の分裂活動」と断定しているが、筆者は 20 年間の現地調査をもとに「チベット問題」が内包する高僧の不在、情報通信環境の変化といった負の側面も踏まえて検討した。

終章「宗教政策、宗教ネットワーク、チベット問題」

東チベットの宗教空間が持つ特質を、(1)中国共産党の軍隊、(2)チベット人幹部と高僧、(3)共産党の宗教復興政策と政府の宗教管理、(4)「寺院の経済的自立政策」と漢人信仰者、(5)宗教と和諧政策、(6)共産党の宗教政策への抵抗と社会の変容という視点から整理した。そして、東チベットにおける宗教政策の実態を江沢民が提示した「四原則」(1)宗教信仰の自由、(2)法に基づく宗教事務の管理、(3)独立自主自営、(4)宗教と社会主義社会への適応から検討した。最後に、ダライ・ラマが属するゲルク派僧院への監視と弾圧が続く一方で、チベット仏教ニンマ派を中心とした活動が、漢人・華人信徒という宗教の新たな担い手を獲得し、今後のチベット仏教と中国共産党の関係を握る鍵になりつつあることを示した。

８．今後の課題

(1)東チベットはチベット人、漢人、ムスリムが混住する地域である。東チベットの宗教空間が持つ特質をより鮮明にする方法として、チベット人とムスリムの関係を視野に入れた調査を行う必要がある。

(2)中国の指導者が胡錦濤から習近平に交代後、中国政府は少数民族地域で宗教調査を行う外国人に対し管理・規制を強化している。今後、習近平時期の宗教政策を把握する上で、慎重に調査地点を選定し、調査方法を再考する必要がある。

(3)日本における現代中国研究の成果は主に日本語で記述されている。今後研究を継続する上で、中国語と英語による研究成果の海外発信にも努力したい。

【資料１】現地調査一覧

1. 1991 年 8 月　青海省湟中県、西寧市
2. 1992 年 8 月　甘粛省夏河県、臨夏県
3. 1993 年 8 月　四川省理県、紅原県
4. 1995 年 12 月　雲南省中甸県
5. 1996 年 12 月　甘粛省碌曲県、合作県、同仁県
6. 1997 年 8 月　青海省玉樹県、共和県、貴徳県、平安県
7. 1997 年 12 月 四川省爐霍県、道孚県、康定県
8. 1998 年 12 月　チベット自治区ラサ市
9. 1999 年 12 月　四川省松潘県、若爾蓋県、紅原県、アバ県
10. 2000 年 12 月　四川省甘孜県、新龍県
11. 2001 年 8 月　四川省理塘県、郷城県、稲城県、雲南省中甸県

12. 2001 年 12 月　四川省色達県、馬爾康県
13. 2002 年 12 月　四川省康定県
14. 2003 年 8 月　四川省徳格県、白玉県、甘孜県
15. 2004 年 8 月　四川省色達県、馬爾康県
16. 2005 年 8 月　四川省白玉県、甘孜県、新龍県
17. 2007 年 8 月　四川省白玉県、甘孜県、色達県
18. 2008 年 8 月　青海省達日県、班瑪県、甘徳県、瑪沁県、同徳県、沢庫県、河南県、同仁県、循化県
19. 2009 年 8 月　四川省康定県、甘孜県、石渠県、青海省玉樹県、瑪多県、西寧市、平安県
20. 2010 年 8 月　四川省康定県、甘孜県、白玉県、徳格県、色達県、馬爾康県
21. 2011 年 8 月　四川省康定県、甘孜県、白玉県、色達県、アバ県
22. 2012 年 8 月　四川省定康県、甘孜県、白玉県、色達県、馬爾康県
23. 2013 年 8 月　ネパール、カトマンズ
24. 2013 年 8 月　青海省西寧市、玉樹県、囊謙県、雑多県
25. 2013 年 10 月　新疆ウイグル自治区ウルムチ市、ヤルカンド、インギサル、カシュガル
26. 2014 年 2 月　中華民国高雄市、屏東市
27. 2014 年 8 月　タイ、バンコク
28. 2014 年 8 月　甘粛省蘭州市、瑪曲県、碌曲県、夏河県、臨夏県
29. 2014 年 10 月 雲南省香格里拉県、徳欽県
30. 2014 年 12 月 台湾新竹県
31. 2015 年 3 月　雲南省徳宏、ミャンマー
32. 2015 年 8 月　甘粛省臨夏市、迭部県、卓尼県、岷県、広河県、合作市、青海省循化県
33. 2015 年 9 月　陝西省延安市、西安市、安塞県
34. 2015 年 12 月　インド、ニューデリー

【資料２】「チベットを歩く」連載一覧

第 1 回「玉樹の仏塔」第 42 号、1999 年 3 月
第 2 回「石に刻まれた祈り」第 43 号、1999 年 5 月
第 3 回「草原を襲った大雪害」第 44 号、1999 年 7 月
第 4 回「勇壮華麗な玉樹の舞い」第 45 号、1999 年 9 月
第 5 回「玉樹の街角から」第 46 号、1999 年 11 月
第 6 回「唐蕃古道に残る文成公主廟」第 47 号、2000 年 2 月
第 7 回「鳥葬の丘」第 48 号、2000 年 4 月
第 8 回「アラーの『加護』でチベットへ」第 50 号、2000 年 9 月
第 9 回「聖地で目にしたグロテスクな光景」
「毛沢東に問うチベット政策ーーチャムド「解放」五〇周年に際して」
「中国雑誌で知るチベットの現状」第 51 号、2001 年 1 月

第 10 回「精霊が宿る郎木寺の丘」第 52 号、2001 年 6 月
第 11 回「四川の天険・二郎山を越えてーー成都から康定へ」第 53 号、2001 年 9 月
第 12 回「毛沢東、『平然と』魔の大湿原を越える」第 54 号、2001 年 12 月
第 13 回「張国燾とダライラマーーアバ県における紅軍長征「分裂」の記憶」第 55 号、2002 年 3 月
第 14 回「チベットの闇夜に棲む魔物ーー高山病とムスタン王国」第 56 号、2002 年 7 月
第 15 回「天空を駈けるリタンの駿馬ーー活仏を迎えた大草原の解放区」第 57 号、2002 年 11 月
第 16 回「茶馬古道に作られた桃源郷ーー雲南省迪慶州に見る『シャングリラ狂騒曲』」第 59 号、2003 年 7 月
第 17 回「仏学院と尼僧を襲った党の宗教政策ーー喇栄五明仏学院の事例から」第 60 号、2003 年 11 月
第 18 回「活仏と共産党を結ぶ『紅い』絆――格達五世と朱徳・四川省甘孜」第 61 号、2004 年 4 月
第 19 回「ヤチェン修行地を覆う神秘のベール ーーアチュウのカリスマ的支配を探る」第 62 号、2004 年 7 月
第 20 回「五明仏学院事件の検証ーー法王を失った学院の現状と苦悩」第 63 号、2004 年 11 月
第 21 回「荒涼と豊饒の浄土ーー迷宮チベットとの出会い」第 64 号、2005 年 4 月
第 22 回「デルゲ印経院を守り抜いた書記と医師ーー周恩来のチベット政策と世界文化遺産」第 65 号、2005 年 8 月
第 23 回「ヤチェン修行地に派遣された『工作組』と『慈輝会』ーー現代中国の宗教空間を探る」第 66 号、2005 年 12 月
第 24 回「ヤチェン修行地とインターネットーーチベット仏教に見る『新霊性運動』の芽生え」第 67 号、2006 年 5 月
第 25 回「電視劇『格達活仏』に見る虚々実々の英雄像ーー白利寺ゲダ五世の死と再生」第 68 号、2006 年 10 月
第 26 回「忘れられた死の病ーー中国の狂犬病対策とチベット犬ブーム」第 69 号、2007 年 4 月
第 27 回「ラサへ通じる『毛主席の道』ーー川蔵公路に敷きつめられた野心と人民幣」第 70 号、2007 年 11 月
第 28 回「チベット流血、理は我に非は彼にーー2008 年ラサ騒乱と東チベットの動向」第 71 号、2008 年 5 月
第 29 回「中国『百年の夢』チベット『五十年の悪夢』――2008 年チベット騒乱から北京五輪」第 72 号、2008 年 11 月
第 30 回「蜂起・叛乱・文革ーーチベットを埋め尽くした治安維持部隊と紅衛兵」第 73 号、2009 年 5 月
第 31 回「台湾人信徒がカトク寺で見た『光り輝く闇』」第 74 号、2009 年 11 月
第 32 回「石積の『僧院』で見た米中人権外交の夢ーー四川省石渠県ソングマニに刻まれた祈り」第 75 号、2010 年 5 月

第 33 回「玉樹に捧げる鎮魂の祈りーーラルン五明仏学院と三人の政府要人」第 76 号、2010 年 11 月
第 34 回「対外開放を阻んだ高地ザムタンの風土病ーー国境なき医師団と愛国衛生運動」第 77 号、2011 年 6 月
第 35 回「東チベット・フィールドワークの技法」第 78 号、2011 年 12 月
第 36 回「茶馬古道とキリスト教ーー孫明経が撮影した西康省」第 79 号、2012 年 7 月
第 37 回「『二〇一三年四川地震』と西康省時期の雅安」第 80 号、2013 年 7 月
第 38 回「東チベット研究の『原石』と宗教空間」第 81 号、2014 年 3 月

【資料３】初出一覧

序章　書き下ろし
第１章「毛沢東から胡錦濤時期における中国共産党の宗教政策とチベット政策」（『大阪工業大学紀要人文社会篇』59(1)、2014 年）を修訂
第２章「活仏と共産党を結ぶ『紅い』絆――格達五世と朱徳・四川省甘孜」（『火鍋子』61、2004 年)、「電視劇『格達活仏』に見る虚々実々の英雄像ーー白利寺ゲダ五世の死と再生」（『火鍋子』68、2006 年)、「ゲダ 5 世に見る中国共産党のチベット政策と統一戦線活動」『大阪工業大学紀要人文社会篇』52(1)、2007 年）を再構成し加筆
第３章・第４章「デルゲ印経院を守り抜いた書記と医師ーー周恩来のチベット政策と世界文化遺産」（『火鍋子』65、2005 年)、「デルゲ印経院とデルゲ土司に見る中国共産党のチベット政策」（『大阪工業大学紀要人文社会篇』53(1)、2008 年）を再構成し加筆
第５章「仏学院と尼僧を襲った党の宗教政策ーー喇栄五明仏学院の事例から」（『火鍋子』60、2003 年)、「五明仏学院事件の検証ーー法王を失った学院の現状と苦悩」（『火鍋子』63、2004 年)、「色達喇栄寺五明仏学院事件に見る中国共産党の宗教政策」（『大阪工業大学紀要人文社会篇』51(2)、2007 年）を再構成し加筆
第６章「ヤチェン修行地を覆う神秘のベール ーーアチュウのカリスマ的支配を探る」（『火鍋子』62、2004 年)、「ヤチェン修行地に派遣された『工作組』と『慈輝会』ーー現代中国の宗教空間を探る」（『火鍋子』66、2005 年)、「ヤチェン修行地とインターネットーーチベット仏教に見る『新霊性運動』の芽生え」（『火鍋子』67、2006 年)、「ヤチェン修行地の構造と中国共産党の宗教政策」（『大阪工業大学紀要人文社会篇』 52(2)、2008 年）を再構成し加筆
第７章「ヤチェン修行地とインターネットーーチベット仏教に見る『新霊性運動』の芽生え」（『火鍋子』67、2006 年)、「色達喇栄寺五明仏学院事件に見る中国共産党の宗教政策」（『大阪工業大学紀要人文社会篇』51(2)、2007 年)、「ヤチェン修行地の構造と中国共産党の宗教政策」（『大阪工業大学紀要人文社会篇』 52(2)、2008 年）を再構成し加筆
第８章「玉樹に捧げる鎮魂の祈りーーラルン五明仏学院と三人の政府要人」（『火鍋子』76、2010 年)、「中国政府の宗教政策と「公益」活動ーーチベット系仏学院の震災救援活動を通じて」（『宗教と社会貢献』2(2)、2012 年）を再構成し加筆
第９章「チベット流血、理は我に非は彼にーー2008 年ラサ騒乱と東チベットの動向」（『火鍋子』71、2008 年)、「中国『百年の夢』チベット『五十年の悪夢』――2008 年チベット

騒乱から北京五輪」(『火鍋子』72、2008 年)、「蜂起・叛乱・文革ーーチベットを埋め尽くした治安維持部隊と紅衛兵」(『火鍋子』73、2009 年)、「チベット周縁地域に築かれた宗教空間――「2008 年チベット騒乱」と四川省甘孜チベット族自治州を中心に」(『大阪工業大学紀要人文社会篇』54(1)、2009 年) を再構成し加筆

終章　書き下ろし

【資料４】日本学術振興会科学研究費補助金交付一覧

１．研究種目：基盤研究 C（研究代表者)、期間：2004 年度～2005 年度
研究課題名：東チベットにおける中国共産党の民族政策・宗教政策及び民族自治に関する研究
研究課題番号：10288756、研究分野：政治学

２．研究種目：基盤研究 C（研究代表者)、期間：2008 年度～2011 年度
研究課題名：四川省チベット地区における中国共産党の宗教政策及び統一戦線活動に関する研究
研究課題番号：10288756、研究分野：地域研究

３．研究種目：基盤研究 C（研究代表者)、期間：2012 年度～2015 年度
研究課題名：東チベットにおける『宗教紛争の構造』と『宗教ネットワークの形成』に関する研究
研究課題番号：24510361、研究分野：地域研究

４．研究種目：研究成果公開促進費・学術図書（研究代表者)、期間：2014 年度
研究課題名：「東チベットの宗教空間」
研究課題番号：265116、研究分野：地域研究

５．研究種目：基盤研究 C（研究代表者)、期間：2016 年度～2019 年度
研究課題名：越境するイスラーム紛争・チベット問題に関する実証研究――「宗教 NGO」の視点から
研究課題番号：16K02022、研究分野：地域研究

以上